

「ダビデの子以上とは」

マルコによる福音書12章35-40節

森島 牧人 牧師

主イエスが地上の生涯の終わりのところ、いわゆる受難週の中で「何故か」と問われた「メシアはダビデの子だ」という人々の強い思い、これは主イエスの誕生物語に於いても、星に導かれた占星術の学者たちが東方からダビデの町ベツレヘムへ「ユダヤ人の王・メシア」を拝みに来たとあり、その時学者たちを主イエスのもとに導いたという星は「ダビデの星」として現在のイスラエルの国旗となっています。また、主イエスの系図上の父ヨセフもダビデの家系とされ、主イエスのエルサレム入城の際の人々も「ダビデの子にホサナ（救い給え）」と熱狂的に叫んで主を迎えています。パウロもその書簡で「御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ・・・」と書いています。

ところが十字架の道が目前に迫ったこの日、主イエスは、ダビデの詩「わが主に賜った主の御言葉。『わたしの右の座に就くがよい。わたしはあなたの敵をあなたの足台にしよう。』」（詩110）を引用し、「ダビデの子としてのメシア像」を明確に否定されたのです。それは、「ダビデがメシアを主と呼んでいるように、救い主はダビデの子ではなく、ダビデ以上の存在である」ということでした。これは単に、主がダビデより偉いということをおっしゃったわけではありません。それでは、「メシアが生まれるとしたらダビデの子だ」というメシア信仰はどうして生まれたのでしょうか。

ダビデの時代、イスラエルは最大の敵ペリシテにずっと脅かされていました。そんな時にペリシテの将軍である大男のゴリアテを少年ダビデが五つの石で倒してしまったのです。これに歓喜した人々のダビデへの期待は大きく膨らんで行き、これに不安を感じた当時のイスラエルの王・サウロに命を狙われることになり、ダビデは逃亡生活を余儀なくされました。やがてペリシテ軍との戦いに敗れて自害したサウロ王に代わって王として迎えられたダビデは、ペリシテ軍を退け、民を統一し、名実ともに一つの国家としてのイスラエルを打ち立てたのでした。そんなダビデを人々が高く評価し、理想の王として尊敬したのは言うまでもありません。そのようなことから、その後イスラエルの民は苦難に陥ると、きっとダビデのような王が再び現れて自分たちの国を建ててくれる、そしてそのユダヤの王メシアは、必ずダビデの血筋であると信じたのです。これが彼らの「メシア信仰」でした。

でも、ここで大切なことは、「聖書には何が書かれているか」です。というのは、不思議なことに旧約聖書ではダビデは栄光の君主としては描かれておらず、人間としての弱さを持った一人の罪人として描かれているからです。その罪の大きな一つが「ウリヤの妻バト・シェバ」とのことです。夫が出陣中である人妻バト・シェバに惹かれて王宮に連れて来たダビデは、彼女が身ごもったことを知ると、王の特権を用いて夫ウリヤを戦死させ、彼女を妻にするという卑劣極まりない行動に出たのです。神が怒って遣わされた預言者ナタンに罪の重大さを指摘されたダビデはそのことに気づき、一人の罪人として神の前に跪きます。この時ダビデが歌ったのが詩篇の51篇で、「神よ、わたしを憐れんでください 慈しみをもって。深い御憐みをもって 背きの罪をぬぐってください。・・・」と告白しました。神は彼を赦しますが、罪の価は死であるとして生まれて来た子どもは打たれます。この後も聖書は、ダビデの人間としての宿命を、実に悲しく記して行くのです。そこには、人々が求める「ダビデ大王」の姿などはなく、あるのは罪に苦しむ一人の人間の姿でした。

十字架を前に主イエスが言われた「メシアはダビデの子ではない」は、しかし、このダビデを嫌ってのもでも、メシアの栄光を言われたのでもありません。人々から唾を吐かれ、罵られて十字架を背負いゴルゴタへ歩まれる主イエス、その姿は惨めに生涯を終えるダビデと重なります。しかし、ここに根本的な違いがあります。ダビデは自身の罪に対する裁きを受けるのですが、主イエスは自身の罪ではなく、すべての人間の罪を背負って神の裁きを受けるというところです。ダビデよりもさらにへりくだり、謙遜になって十字架上で死ぬ、それはまさにメシアであり、もはやメシアはダビデの子ではありません。

神の子でありながら、あのダビデより徹底した一人の罪人として神の前に立とうとされる主イエス・・・、それこそが真のメシア・キリストであり神の子であると主イエスは宣言し、十字架へと進んで行かれるのです。

(説教要約 羽入田悦子)

